

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00977

研究課題名（和文）日本列島における縄文磨製石斧の基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on Jomon-Axe in Japanese Archipelago

研究代表者

水ノ江 和同（Mizunoe, Kazutomo）

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：10824568

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：3年間の研究は「日本列島の各地から出土する縄文磨製石斧を、日本列島を網羅する精密な土器編年に基づいて地域的な年代を確定し、縄文磨製石斧の地域変遷と系統関係を追究すること」であった。その結果、定角式石斧・乳棒状石斧・擦切石斧に関して、出現地の確定、時間の推移に伴う空間的展開と終焉を日本で初めて詳細に追うことができ、大きな成果を得ることができた。

具体的には、定角式石斧の出現は前期前葉の北陸であり、東は東北、西は近畿まで展開した。乳棒状石斧の出現は前期前葉の関東・北陸であり、西日本一帯にのみ展開した。擦切石斧は草創期末葉から早期前葉にかけて東北で出現し、北海道・北陸・関東北部にも展開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

全国の地方公共団体などに所属する埋蔵文化財専門職員を研究協力者としてチームを作ることで、個人では成しえない日本列島規模での縄文磨製石斧研究を実現させ、多くの成果を得た学術的意義は大きい。

また、3年間の研究成果を総括報告書として取りまとめ、500冊印刷して大学等研究機関、47都道府県・20政令指定都市・主要市町村をはじめ、関係の発掘調査機関など合計で240か所に配布し、この研究成果を広く公表して活用の可能性を広げた社会的意義も大きい。

研究を個人の業績とするのではなく、公共の成果として周知することが、科学研究費の学術的・社会的存在意義とする基本理念の具体化に成功したと考える。

研究成果の概要（英文）：The study for 3 years was settled by the generation when it was regional based on precision earthenware vessel chronological order to cover all the Japanese Islands in a Jomon polished stone axe excavated from each place of the Japanese Islands, and "it was to investigate the area change and the system relations of the polished stone axe in Jomon". Specifically, the appearance of the constant corner type stone ax was Hokuriku of the first half year preceding page, and the east was northeastern and developed the west to Kinki. It was Kanto, Hokuriku of the preceding page, and the appearance of the pestle-formed stone ax unfolded only in the West Japan whole area in the first half year. I hung the cutting by rubbing stone ax to the early preceding page from the last years for days of creation and it was northeastern and appeared and developed it in Hokkaido, Hokuriku, North Kanto.

研究分野：考古学（縄文時代）

キーワード：縄文時代 磨製石斧 土器編年 定角式石斧 乳棒状石斧 擦切石斧 縄文磨製石斧編年

1. 研究開始当初の背景

縄文磨製石斧は、縄文土器、石鏃に次いで縄文時代の遺跡から普遍的に出土する遺物である。石鏃と異なり、森林における木材の伐採・加工・調整、集落における建物建設や木製品製作、個人や集団としての威信財や保有財といった機能の多様性は、既に多くの研究が指摘してきたところである。

しかしこれまでは、視覚的に判断しやすいその形態的特徴に多くの注意が払われたため、縄文時代全般を通じて日本列島全体に普遍的な存在であるにもかかわらず、残念ながら各地域における変遷や時期別の特徴抽出が研究の中心であった。そのおもな理由としては、日本列島全体の縄文土器編年網の中で年代的な位置づけを行わなかったことと、製作技法と使用方法に関する意識が十分に醸成されなかったためと考えられる。この状況は、縄文磨製石斧の存在が確認された明治期後半期から現在に至るまで、いまだ解消されていない。

2. 研究の目的

縄文磨製石斧の出現・展開・終焉に関する研究については、これまで地域研究が優先されてきたためほとんど進んでなく、日本列島規模での実態がほぼ不明瞭であった。そのため、縄文土器と石鏃に次いで、縄文時代の遺跡から普遍的に出土する縄文磨製石斧の日本列島規模での動態を明らかにし、縄文土器と石鏃との組み合わせにより、これまで誰も成しえなかった新たな局面からみた縄文文化研究を打ち出すことを目的とした。

なお、近年、縄文磨製石斧の石材として注目されているアオトラについて、その原産地（北海道平取町）における状況はほぼ不明であった。そこで、現地調査を実施して未解明の原産地の状況、すなわち、アオトラという石材は露頭地があってそこから採掘するのか、それとも河川の転石を採集するのか、採集するなら河川の上流か、中流か、下流か、あるいは海岸線か、などを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究ではまず、日本列島の各地から出土する縄文磨製石斧を、日本列島全体を網羅する精密な土器編年に基づいて地域間における年代な併行関係を確定する。そのうえで、形態的特徴、製作技法、使用方法、の3要素に関する分析を上手く組み合わせ、日本列島各地での縄文磨製石斧の地域変遷と系統関係を追究することを第一義とする。ここでいう3要素とは具体的には、形態やサイズから得られる類型の設定、地域や時期によって異なる製作技法の復元、石斧と柄の装着方法の違いによって得られる使用方法の復元、である。それを踏まえ、現在確認されているいくつかの原産地・製作遺跡を起点とした流通の問題についても必要に応じて検討を加える。特に、縄文磨製石斧に頻繁に使用される蛇紋岩の産地同定の可能性については、本研究にとって不可欠な要素である。

ここで重要になるのが、協力・連携していただくおもに地方公共団体に所属する埋蔵文化財専門職員たちと、まず共通の時間軸である精密な縄文土器編年網を策定し、その上で使用方法に関する共通認識を有することである。特に、石斧と柄の装着方法によって異なる縄文磨製石斧の使用方法については、共通する観点に基づき分類することが重要になる。これまで縄文磨製石斧の装着方法に関しては、日本列島規模で網羅的に追究した研究の実績はなかっただけに、大きな成果が期待される。

また、近年縄文磨製石斧の石材として注目されているアオトラについて、実際にその産地を踏査して、アオトラの露頭状況や、河川のどの地点の転石を縄文人は採集していたかを探る。そのうえで、アオトラという石材の自然科学分析も専門家に参画していただき実施する。

4. 研究成果

本研究は当初、「日本列島の各地から出土する縄文磨製石斧を、日本列島を網羅する精密な土器編年に基づいて地域的な年代を確定する。そのうえで、形態的特徴、製作技法、使用方法、の3要素に関する分析を上手く組み合わせ、日本列島各地での縄文磨製石斧の地域変遷と系統関係を追究すること」を目指した。については、定角式石斧・乳棒状石斧・擦切石斧に関して、出現地の確定、時間の推移に伴う空間的展開と終焉をかなり詳細に追うことができ、大きな成果を得ることができた。具体的には、定角式石斧の出現は前期前葉の北陸であり、東は東北、西は近畿まで展開した。乳棒状石斧の出現は前期前葉の関東・北陸であり、西日本一帯にのみ展開した。擦切石斧は草創期末葉から早期前葉にかけて東北で出現し、北海道・北陸・関東北部にも展開した状況を確認・確定した。これはいままでも誰も成しえなかった成果であり注目される。

しかし、については、製作遺跡そのものの事例が少なく、また、柄との装着方法を想定できる資料も限定的であることから、いずれも各地の代表例の事例紹介に留まり十分な研究成果を挙げることができなかった。おそらく、だけの特定研究を実施しなければ、一定程度以上の成果を得られる領域でないことを、今回の研究で確認した。

また、についても、出現や展開の要因や背景などに十分に迫れたとはいえない。土器型式の展開や変遷と縄文磨製石斧のそれとの間に、整合性がある場合もあれば、ない場合もあり、その関係性の解明

は今後に向けての大きな課題の一つである。さらに、石材産地の問題も重要で、縄文磨製石斧の製作に際しての石材の選択や利用は、製作技法や使用方法にも影響があると考えられる。

アオトラについては、今回、産地で採集した原石の成分分析を行い、その情報を報告書において提示した。これまでのアオトラの成分分析は、遺跡から出土するアオトラ製縄文磨製石斧で行っていたが、本来は産地の石材から行うことが原則であり、その情報を公開できた意義は大きい。

このように、縄文磨製石斧の研究には、については大きな成果を得た反面、については解決しなければならない課題が多々であることが、今回の研究で判明した。いずれも高いハードルばかりであるが、取り組むべき要点が明確になったことから、今後は少しずつでも着実に課題解決を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------